長野県内の石製摸造品製作遺跡

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 金沢大学古代文明・文化資源学研究所 公開日: 2025-04-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 櫻井 秀雄 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/0002002501

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.

金沢大学考古学紀要 46　2025,　1-18.

長野県内の石製摸造品製作遺跡

櫻井 秀雄
（長野県立歴史館）

１．はじめに

石製摸造品は古墳時代を代表する祭祀遺物であり、長野県内での出土数は全国的にみても多い部類に入るだろう。一方、その製作遺跡となると、その可能性があるものを含めてもごく少数にすぎない。平成 17（2005）年に刊行された埋蔵文化財研究会『古墳時代の滑石製品』の中で、私は長野県内の滑石製品出土遺跡の集成とともに製作遺跡の概要についてもまとめたが、そこでは本村東沖遺跡（長野市）、篠ノ井遺跡群（長野市）、五輪堂遺跡（千曲市）、東裏遺跡Ⅱ（埴科郡坂城町）、社軍神遺跡（上田市）、入山峠（北佐久郡軽井沢町）、神坂峠（下伊那郡阿智村）の７遺跡をとりあげるにとどまった（櫻井 2005）。そのうち社軍神遺跡の滑石製品は勾玉や鏃形石製品という玉類や石製品であり、石製摸造品は含まれていないため、石製摸造品製作遺跡とは異なる。

その後、浅川扇状地遺跡群（長野市）と西一本柳遺跡（佐久市）で新たに石製摸造品の製作工房跡がみつかり、報告書も刊行されたことから、今回は長野県内における石製摸造品製作遺跡について新資料も含め、改めて考察していきたいと思う。

なお、本稿では石製摸造品を製作した竪穴住居址を「工房跡」とし、その遺跡について言及する場合には「石製摸造品製作遺跡」と表記していく。

また、工房跡の定義については、寺村光晴氏の論を踏まえて深澤敦仁氏が以下の７つの条件を提示している（寺村 1966、深澤 2001）。深澤氏は、①竪穴住居であること、②未製品が出土していること、③石核・剥片が出土していること、④完成品が出土していること、⑤工具が出土していること、⑥白色粘土や粉末が確認できること、⑦工作用ピットや溝が確認できること、の７つをその条件とした。そして、①を満たした上で、条件②・③のうち少なくとも一つを満たしたものを製作跡の可能性があると考え、④～⑦については①～③を満たした上で、さらに可能性を高めるための条件としている。本稿ではこの深澤氏の条件を参考として論を進めて行きたい。

２．事例紹介

(1) 浅川扇状地遺跡群（長野市）

浅川扇状地遺跡群は、長野市の長野盆地北西部に位置し、長野市内有数の規模を誇る遺跡群である。長野盆地は周囲の山地から河川が流入し、下流部に扇状地を形成している。浅川扇状地はそのうちのひとつであり、飯縄山南東麓を源流とする北浅川と南浅川が合流した浅川が運搬した土砂で形成される。長野県長野建設事務所による都市計画道路建設に伴い、平成 22（2010）年から平成 31・令和元（2019）年にかけて長野県埋蔵文化財センターにより発掘調査が行われた（註１）。調査区は長野市桐原・吉田地籍に所在し、弥生時代後期から平安時代の竪穴建物跡 218 軒などがみつかっている。

竪穴建物跡ＳＢ3062 が石製摸造品製作工房と考えられる。本跡では、入口部側の床面を中心に石製摸造品やその未製品・剥片・破片が 4000 点以上出土している（図１・２）。竪穴建物跡の規模は 7.0×6.46ｍの方形を呈し、検出面からの深さは 0.16ｍである。入口部にはピット５があり、東壁・西壁からはそれぞれピット２とピット３へ向かって間仕切り溝が伸びている。入口部から間仕切り溝周辺が作業場の可能性がありそうである。石製摸造品はすべて滑石製であり、有孔円板４点、勾玉形１点、臼玉 12 点と、その未製品 43 点、砕片４点、剥片６点が図化されている。未製品では臼玉、有孔円板、勾玉形があり、製作過程に出た砕片、剥片もみられる。土器の他、台石や敲石も出土しており、報告者はこれらも石製摸造品の製作工程を示す資料と理解している。５世紀代に位置づけられる。中期の竪穴建物跡は６軒が検出されている（西他 2021）。

(2) 本村東沖遺跡（長野市）

本村東沖遺跡も浅川扇状地遺跡群のひとつであり、前述した県埋蔵文化財センター調査地点から約 1.4 ㎞北東にある。

長野高校校舎改築事業に伴い、長野市教育委員会が平成３（1991）年に発掘調査を実施し、竪穴住居址 104 軒、

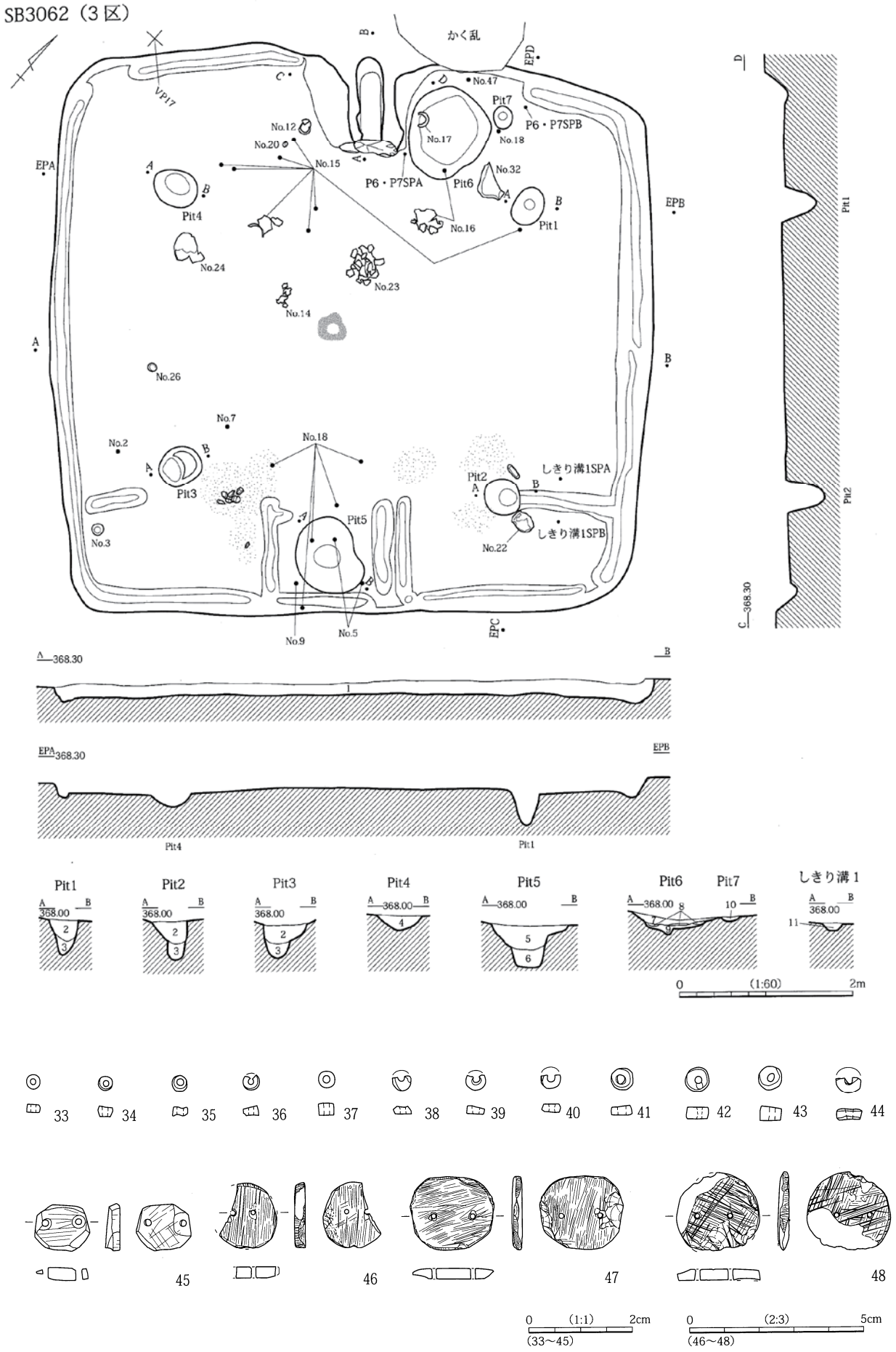


図１　浅川扇状地遺跡群SB3062（１）

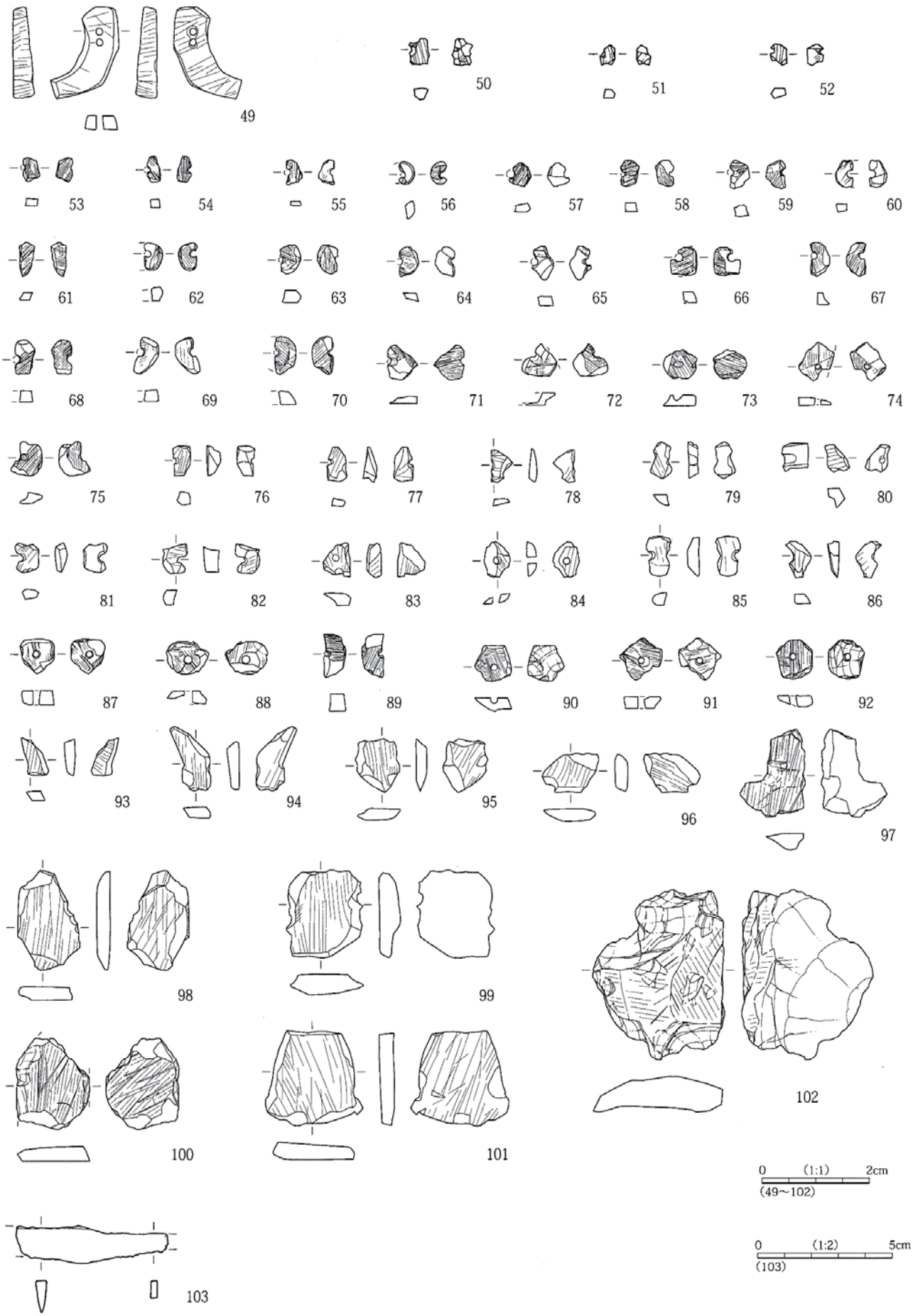


図２　浅川扇状地遺跡群SB3062（２）

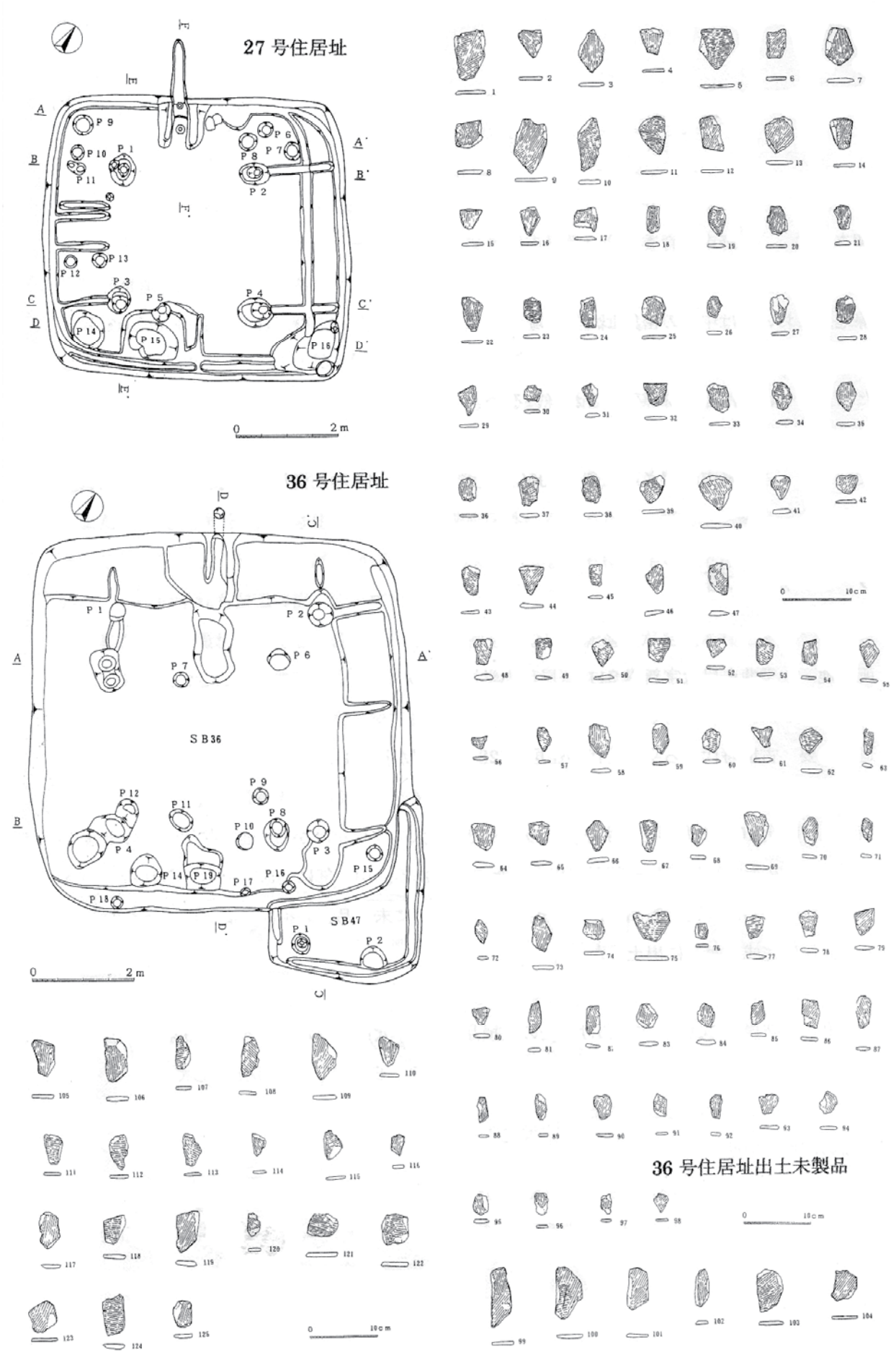


図３　本村東沖遺跡

建物跡３址などが検出された。竪穴住居跡址では弥生時代後期 41 軒、古墳時代中期から後期 56 軒を数え、古墳時代前期は２軒にとどまる（千野 1993）。

古墳時代中期から後期については５世紀中葉から６世紀初頭にかけて３時期のものが認められる。このうち 27 号住居址と 36 号住居址が石製摸造品製作工房跡と考えられる（図３）。

27 号住居址は 6.0×5.5ｍの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは 50 ㎝前後と深い。間仕切り溝が計７本みられ、東側壁際には幅 50 ㎝、深さ 10 ㎝ほどのベッド状の高まりが認められている。南西隅にあるＰ14 は径 60 ㎝、深さ 30 ㎝を測り、覆土内より臼玉、石製摸造品の未製品が出土し、工作用ピットの可能性が高いと報告者は指摘する。

36 号住居址は、7.30×7.50ｍのやや大型の隅丸方形を呈する。間仕切り溝と高さ 10 ㎝程のベッド状の高まりが検出されている。ベッド状の高まりは、北壁、東壁、南壁際の３か所でみられ、北壁と東壁際に幅１ｍ前後、南壁際には幅 30 ㎝程の規模である。東壁中央に位置する間仕切り溝とＰ３よりのびる間仕切り溝によって区画されたベッド状部分から大量の石製摸造品の未製品が出土した。ベッド状部分を除く住居址中央部の床面上には砂質土にまじえて円礫が敷きつけられていたような状態で検出されている。報告者の千野浩氏はこの上に板材等を敷設して床面とした可能性も考えられるとする。本住居址から出土した石製摸造品の未製品は 125 点であり、すべてが滑石製で、穿孔前の研磨段階に位置するものと考えられる。未製品の内訳は、剣形 98 点、勾玉形 22 点、有孔円板５点となっている。未製品のすべてが厚さは 0.2～0.4 ㎜とほぼ均一な扁平なものである。原石や剥片、屑片等は全くみられず穿孔されたものもない。剣形、勾玉形、有孔円板の研磨段階のみの工程を行った工房跡と理解できよう。なかでも剣形の未製品が多いことは注目される（櫻井 1993a）。また、31 号住居址からは子持勾玉１点が出土している。

(3) 篠ノ井遺跡群（長野市）

長野市篠ノ井に所在し、千曲川が形成する自然堤防上に展開する県内でも有数の大遺跡群である。これまで幾次もの発掘調査が実施されてきたが、平成７（1995）～11（1999）年度にかけて長野市教育委員会が行った主要地方道長野・上田線塩崎バイパス建設に伴う発掘調査により石製摸造品製作工房跡がみつかっている。Ⅶ区Ｎ－２地点ＳＢ35 と名付けられた竪穴住居址がそれである（図４）。このＳＢ35 は北側約３分の１が調査区外になるが、一辺約 5.1ｍの方形を呈する。ほぼ中央に間仕切り溝と考えられる浅い溝が確認されている。Ｐ３上面を含む周辺の床面上から滑石製の臼玉の未製品が出土している（図４のトーン部）。石製摸造品製作工房跡と理解してよいだろう。このＳＢ35 が位置するⅦ区や隣接するⅧ区を中心に臼玉が多量に出土しているが、そうした臼玉の製作を行っていた工房跡であると言えるだろう。Ⅶ区では臼玉 365 点、Ⅷ区では 823 点が出土しており、各調査区合計では 1272 点の臼玉が検出されている。この発掘調査では、他の石製摸造品では鏡形１点、勾玉形２点、剣形８点、有孔円板 26 点、その他破片の合計 39 点の出土がみられている。また、Ⅷ区Ｓ－１（1）ＳＢ01 の竪穴住居址からは子持勾玉１点も出土している（風間 2002）。

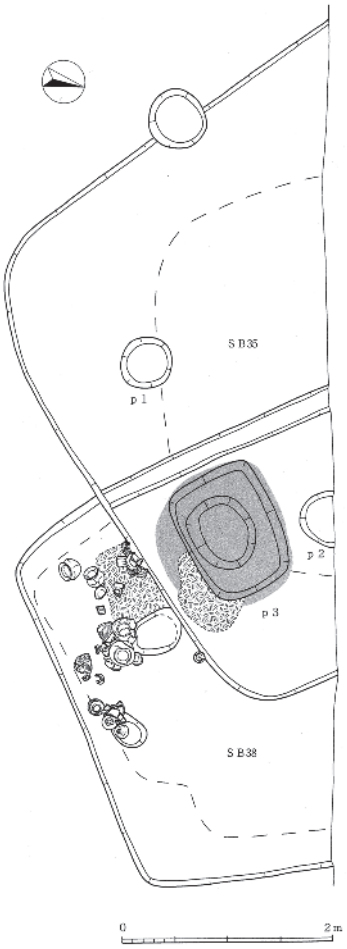


図４　篠ノ井遺跡群 SB35

(4) 五輪堂遺跡（千曲市）

千曲市屋代に所在し、粟佐遺跡群のひとつである。昭和52（1977）年に屋代小学校改築工事に伴い当時の更埴市教育委員会が発掘調査を行った。この調査では、古墳時代から平安時代の住居跡28軒等がみつかったが、古墳時代の９号住居址が石製摸造品製作工房跡として考えられる（図５）。東西８ｍ、南北推定 10mの方形を呈したこの住居跡では中央に地床炉とみられる焼土があり、滑石製品はこの焼土を境に東側に未製品、破損品、石屑等が多く散らばり、西側には完成品が主に出土したと矢島宏雄氏は報告する（矢島 1978・1982）。出土した石製摸造品には、東側から臼玉完成品12点、穴をあけ研磨後の破損品14点、穴をあけたもの４点、石を割りだしたもの６点、管玉にするために研磨したもの４点、西側からは、有孔円板２点、臼玉７点、管玉２点がある。ハンマー等の工具は出土していないが、鉄製品３点は伴っていたという。詳細は不明であるが、石製摸造品製作跡として理解できる住居跡である。

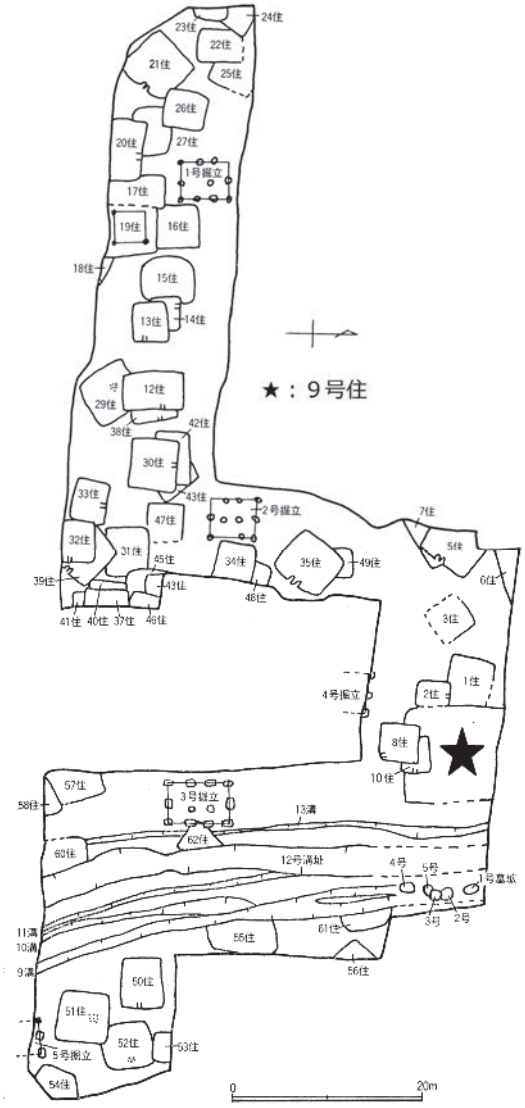


図５　五輪堂遺跡_北区_遺構全体図

(5) 東裏遺跡Ⅱ（坂城町）

埴科郡坂城町南条に所在する南条遺跡群のひとつであり、土器列が環状にめぐる特異な祭祀遺構が発見された青木下遺跡と隣接する一連の遺跡である。平成４・５（1992・1993）年に町道建設に伴い坂城町教育委員会が発掘調査を実施した。古墳時代中期から平安時代を主体とする集落遺跡である。このうち３軒の竪穴住居址（Ｈ１号・Ｈ２号・Ｈ３号）が石製摸造品の製作工房跡と考えられている（助川 1994・図６）。

Ｈ３号住居址は8.2×8.0mの比較的整った方形を呈する大型住居址である。Ｐ15が工作用ピットであると報告者の助川朋広氏は指摘する。テラスをもち、カマドの位置と反対側の壁面に接している。1.4×１mの規模を測り、上部が方形、下部が円形を呈し、ほぼ１mの深さをもつピットである。北側には白色系の粘土がマウンド状に盛り上がっており、工作用ピットとの関連性が考えられている（註２）。滑石製の臼玉３点と未製品は工作用ピット周辺から出土している。６世紀前半に位置づけられる。

また、同時期に位置づけられるＨ１号住居址とＨ２号住居址からも工作用ピットが検出されている。規模は一部が調査区外にかかるため明確ではないが、Ｈ１号住居址が一辺6.6m、Ｈ２号住居址が一辺5.8mをはかるものとみられる。ともに工作用とみられるピットが検出されている。石製摸造品はいずれも臼玉の出土をみる。

(6) 西一本柳遺跡（佐久市）

佐久市岩村田に所在し、岩村田遺跡群の中核をなしている。開発が目白押しの地域でもあり、これまで20次以上にわたる数多くの発掘調査が行われ、弥生時代、古墳時代～古代の大規模な集落遺跡として知られている。

平成29（2017）年に佐久市教育委員会が実施した都市公園整備事業に伴う第22次の発掘調査では、弥生時代から中世の竪穴住居址19軒、掘立柱建物址３棟、古墳１基、円形周溝墓４基などが検出された。このうち石製摸造品製作工房跡として、H11号住居址、H15号住居址、H19号住居址の３軒が確認された（小林 2019・図７～10）。

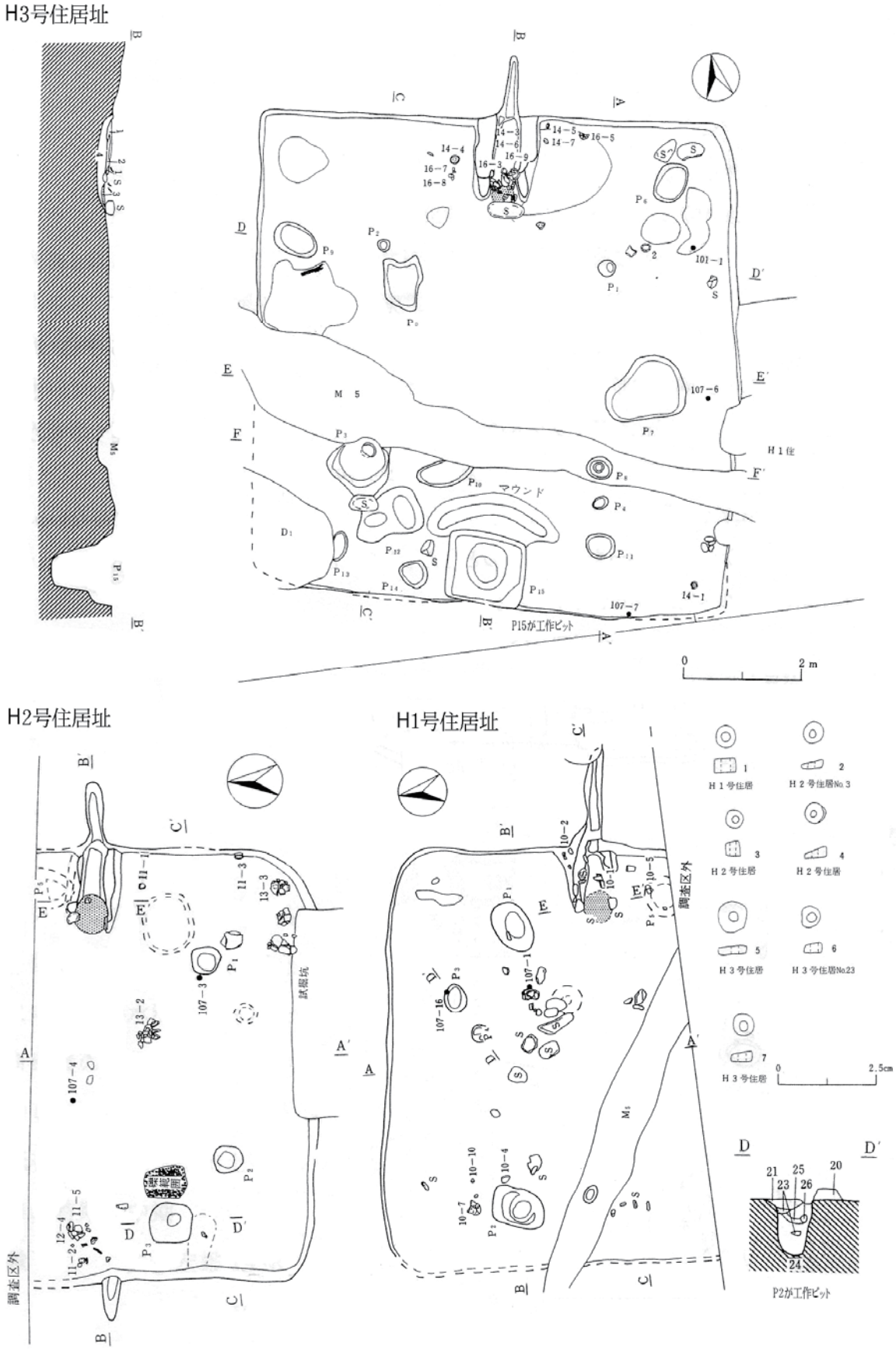

H3号住居址
H2号住居址
H1号住居址
マウンド
P15が工作ピット
P2が工作ピット
調査区外
試掘坑
H1住
H1号住居
H2号住居No.3
H2号住居
H3号住居
H3号住居No.23
0
2 m
2.5cm

図６　東裏遺跡Ⅱ

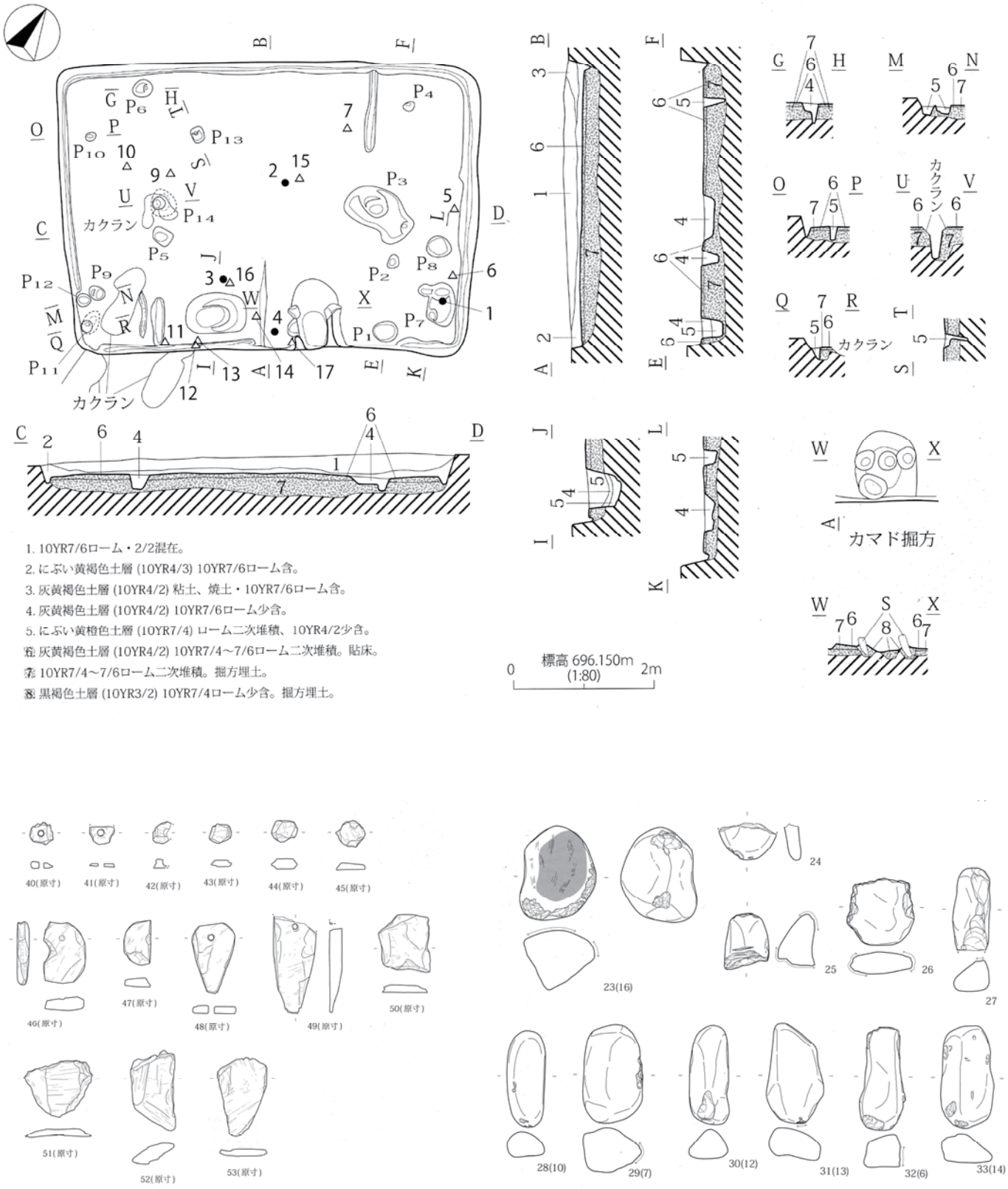
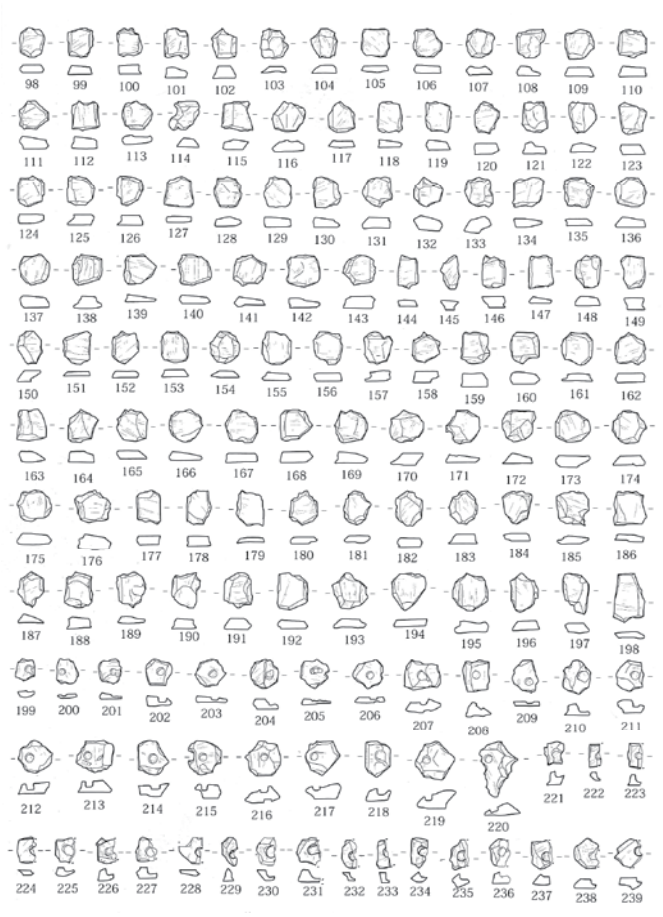
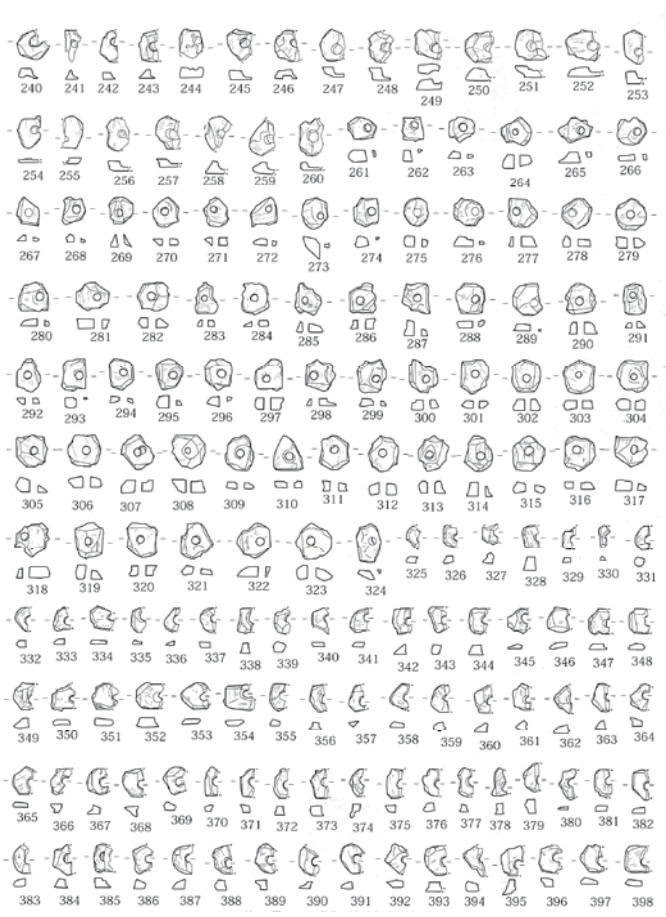
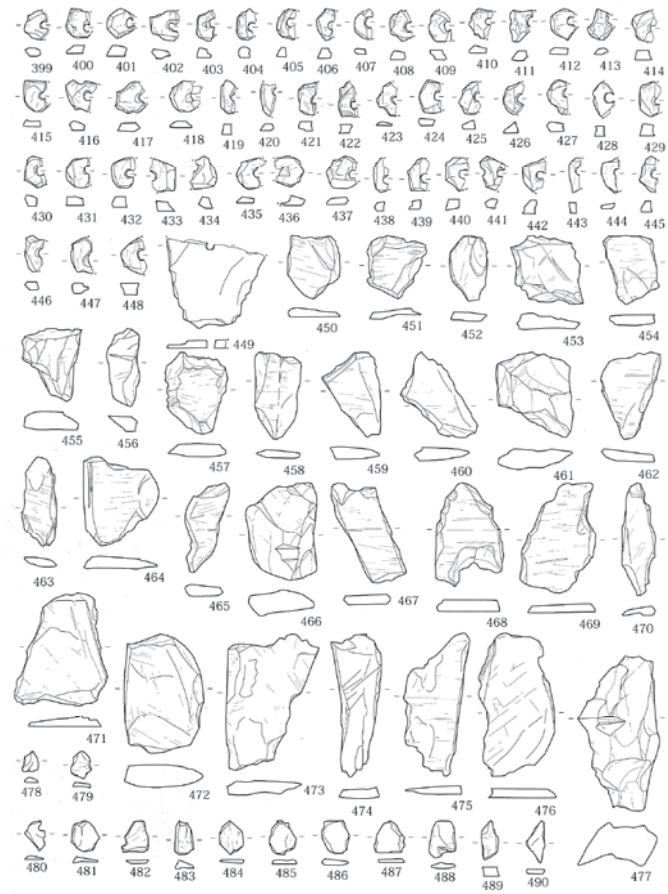


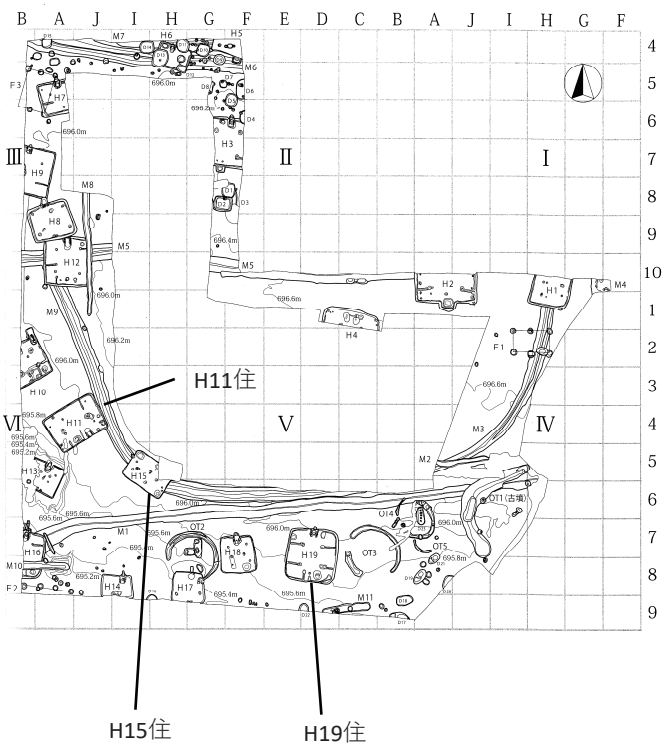
図７　西一本柳遺跡H11号住居址

図８　西一本柳遺跡H15号住居址（１）



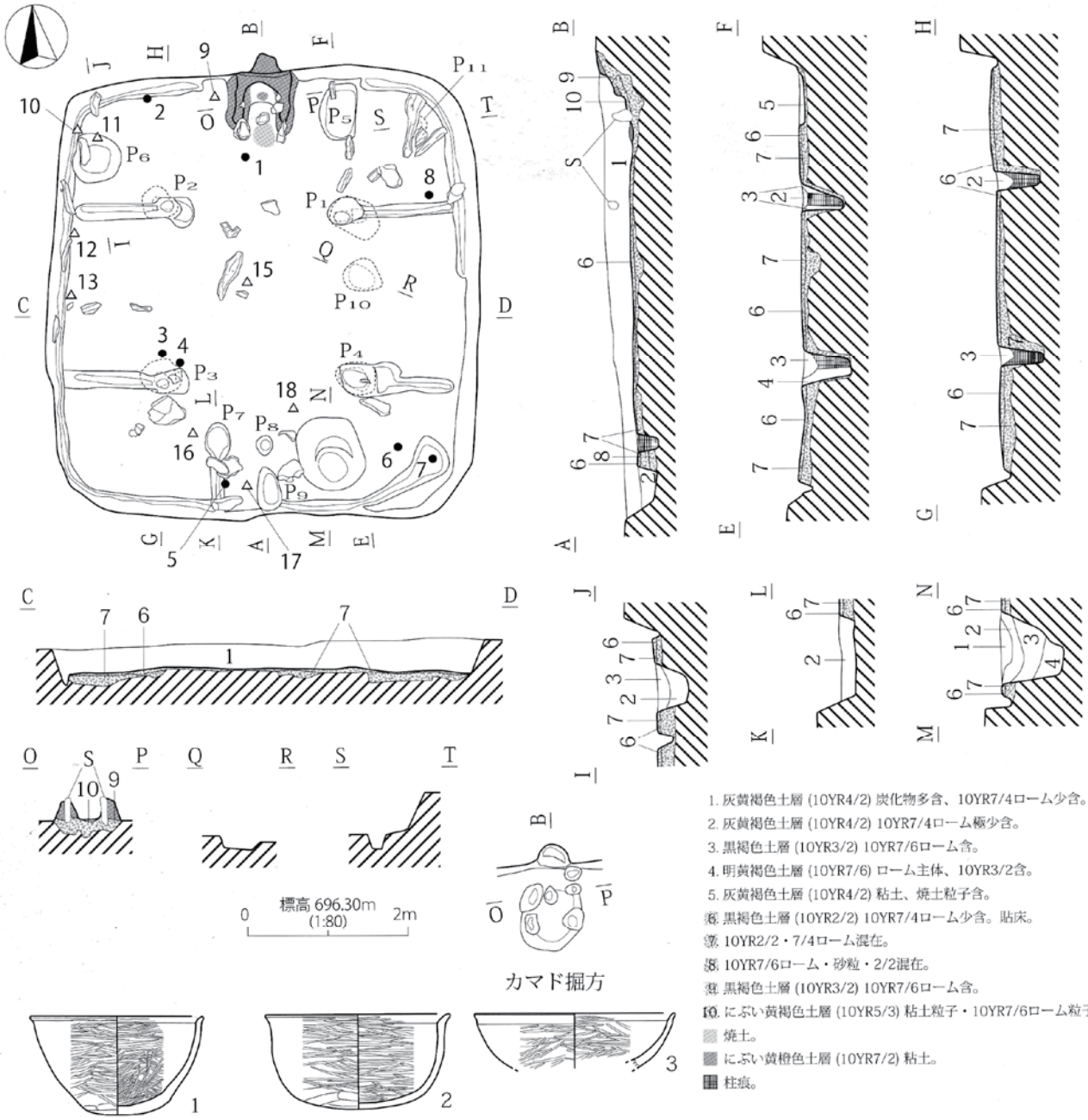






22次調査_遺構全体図

図９　西一本柳遺跡H15号住居址（２）



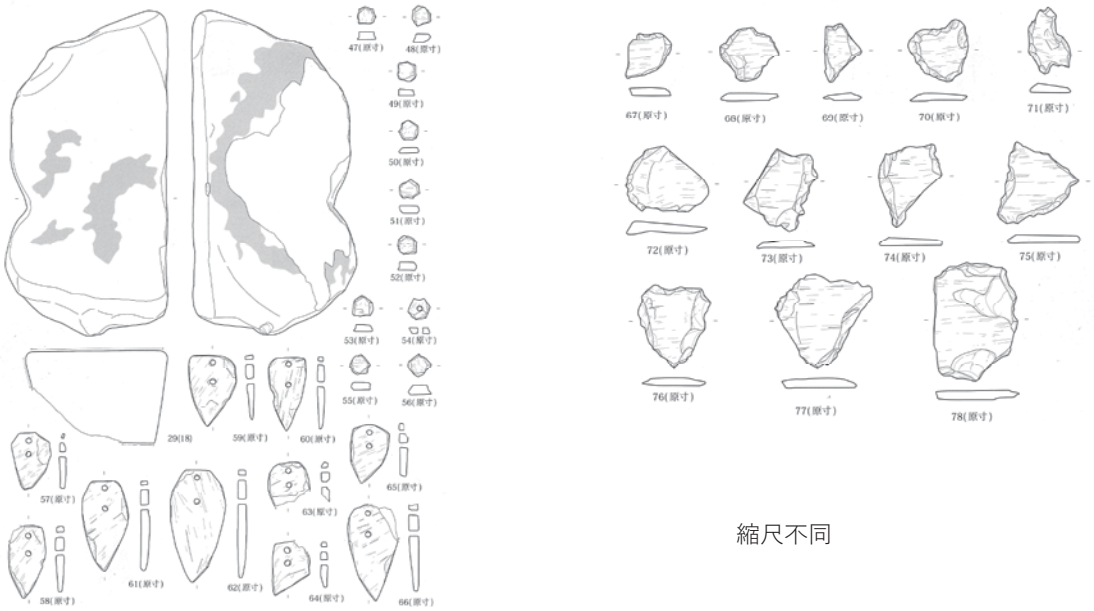


図10　西一本柳遺跡H19号住居址

H11 号住居址は 5.99×4.17mの方形を呈し、佐久地域では北壁が一般的なカマドが南壁に設置されている。カマド西脇には貯蔵穴があり、貯蔵穴の西と北壁の北東隅寄りに周溝から垂直に延びる間仕切り溝がみられる。床面上から滑石の微小チップや素材等が多数検出されている。臼玉３点、臼玉未製品３点、勾玉未製品１点、有孔円板か勾玉の未製品１点、剣形模造品２点、石製摸造品の素材４点が出土している。５世紀後葉～６世紀前葉に位置づけられる。

H15 号住居址は 4.74×3.91mの長方形を呈し、５世紀後葉～６世紀前葉に位置づけられる。調査範囲ではカマドはみられなかった。本址からも大量の滑石製の石製摸造品や未製品、原石、剥片、チップが出土している。石製摸造品は勾玉形１点、剣形１点、臼玉 46 点、臼玉未製品 333 点、素材 18 点を数える。Ｐ６は貯蔵穴とみられるが、工作用ピットと断定できるものはなく、出土した鉄製斧を報告者は滑石原石の打割に使用したものである可能性を指摘する。敲石も１点みられている。また、磨・敲石１点の他、編物石 16 点も出土している。

H19 号住居址は 5.72×5.46mの方形を呈し、北壁にカマドが設置されている。５世紀後葉に位置づけられる。主柱穴４基のピットに向かい東西の周溝から間仕切り溝が連結されている。Ｐ７には南壁から間仕切り溝が連結される。Ｐ７～９は出入り口施設と想定される。覆土から多量の炭化材が包含されており。床面上にも散乱していることから焼失住居址と思われる。

石製摸造品には、原石、臼玉２点、剣形 10 点、臼玉未製品 10 点、素材 12 点が出土している。台石や編物石もみられる。編物石は 14 点も出土している。H11 号住居址でも 16 点あり、これらは敲石として使用された可能性もあるかもしれない。

このH11 号住居址とH15 号住居址について、報告者の小林眞寿氏は、H11 号住居址では主柱穴が判然とせず、しかも佐久ではほぼ皆無である南カマドであること。H15 号住居址ではカマドが設置されていないこと。両方の住居址とも長方形であるなど同時期の住居址としては異質であることを指摘し、この２軒が一組として機能していた可能性も論ずる。一方のH19 号住居址ではチップやフレイクが出土していないため、異なる工程の作業が行われていたか、製品や素材を管理していたのではないかとの推測もされている。

(7) 神坂峠（下伊那郡阿智村）

岐阜県中津川市と阿智村の県境にある神坂峠は、入山峠、雨境峠とともに日本で３か所しかない峠祭祀の遺跡として知られている。昭和 43（1968）年に大場磐雄國學院大學教授を調査団長として発掘調査が行われた。現在、遺跡は国史跡、出土品は長野県宝に指定されている。

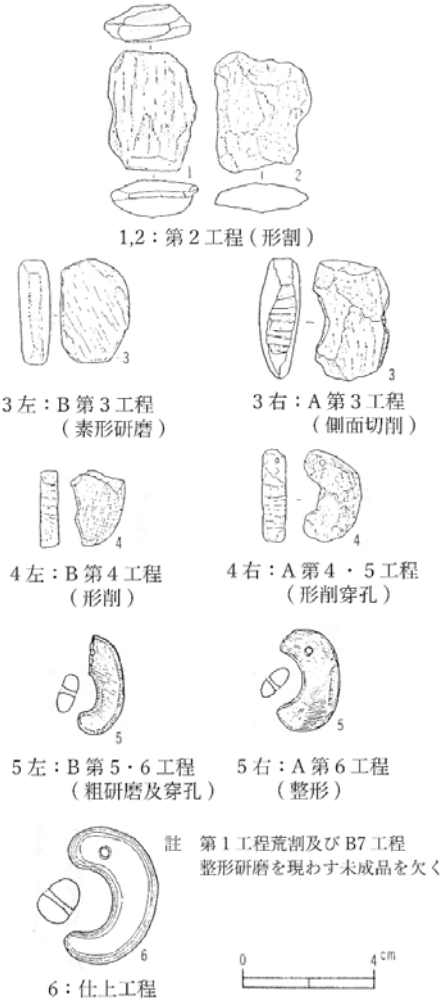
石製摸造品が多量に出土しているが、未製品の出土も少なくない（図 11)。剣形は完形品から破片まで含めて 310 点、有孔円板は 69 点（うち破片 62 点)、勾玉形 27 点（うち破片 19 点、未成品４点)、臼玉 903 点（うち破片 31 点、未成品９点)、刀子 15 点（うち破片 12 点)、斧形１点、鎌形１点、鏡形１点、馬形１点がみられる。剣形の未製品は破片を含めて 52 点あり、未穿孔段階のものや穿孔されていても研磨が粗いものがみられる。有孔円板については数点あり、研磨段階や未穿孔段階のものなどがある。勾玉については９点あり、形割段階、側面切削段階、研磨段階のものがみられている。臼玉については９点あり、未穿孔段階のものや、かなり未整形なものを含んでいる（大場他 1969)。

製作場所や工具の発見はなかったが、このように少なくはない未製品の存在は、峠において製作された可能性も示唆しているといえるだろう。この点については後述する。なお、４世紀後半には峠祭祀が開始されたと私は考えている。

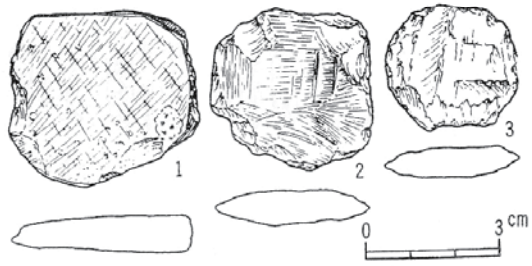
(8) 入山峠（北佐久郡軽井沢町）

入山峠は軽井沢町と群馬県安中市との県境にある。大場磐雄國學院大學教授を調査団長として昭和 44（1969）年に発掘調査が行われた。神坂峠と同じく、峠祭祀を代表する遺跡であるが、ここでも石製摸造品の未製品が出土している（図 12)。石製摸造品としては剣形約 170 点、勾玉・勾玉形５点、臼玉 273 点、有孔円板 37 点、刀子数点などがみられ、この他にも管玉、水晶製棗玉、ガラス玉なども検出されている。未製品及び石屑は微細破片まで含めると多量に出土しており、加工を施しているとみられるものも約 85 点ある。これらは勾玉形、有孔円板、剣形等の未製品である。臼玉の未製品も約 45 点ある。未製品については、勾玉が形割および側面切削工程に属し、有孔円板は形割工程のものばかりで、臼玉は形割および穿孔工程のものである。形割り段階のもの 37 点、形割り後に穿孔された段階のもの８点となっている（椙山 1980)。

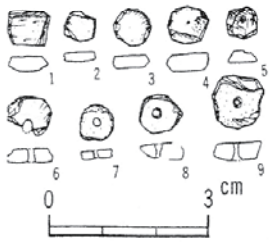
剣形未成品



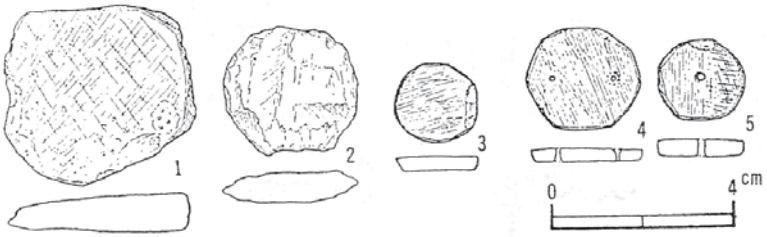
神坂峠における
勾玉製作工程想定図



有孔円板未成品実測図



臼玉未成品実測図



有孔円板の製作工程

神坂峠出土
剣形模造品の製作工程

図11　神坂峠

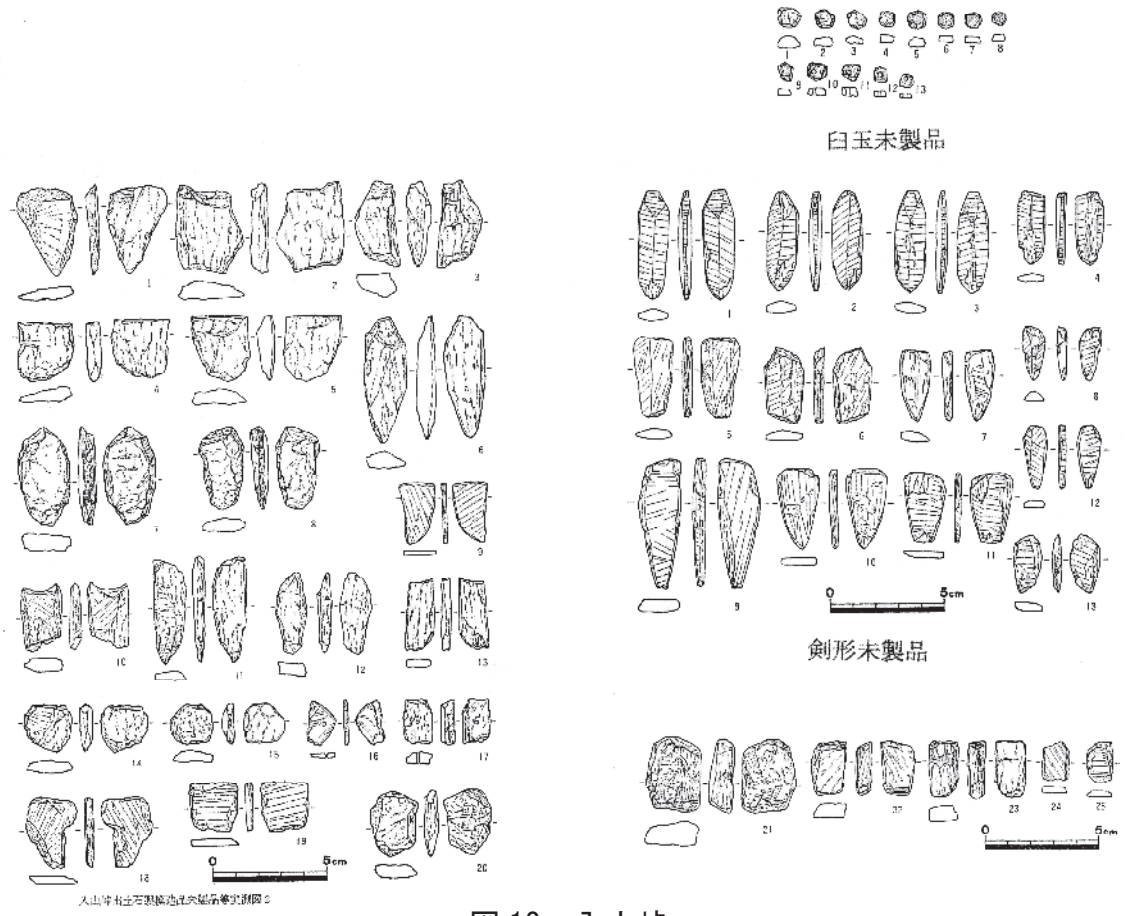


図 12　入山峠

また、入山峠においても神坂峠と同様に、４世紀後半から祭祀が行われていたと考えている。

３．考察

(1) 地域的偏在

今回集成した石製摸造品の製作遺跡は、工房跡の検出されない神坂峠と入山峠を除けば、北信と東信に偏っており、中信や南信では確認できていない（図 13)。北信でも長野市・千曲市・坂城町に限られ、なかでも長野市に３遺跡あり、東信では佐久市の１遺跡のみである。群馬県などと比べると製作遺跡の数は少ないが、そのなかでも地域的な偏在がみられることは指摘してよいだろう。

(2) 遺跡の性格

本村東沖遺跡、浅川扇状地遺跡群、篠ノ井遺跡群、西一本柳遺跡は大規模かつ中核的な集落遺跡であることが指摘できる。

本村東沖遺跡では古墳時代中期～後期の住居址が 56 軒検出されており、５世紀後半以降の集落については、

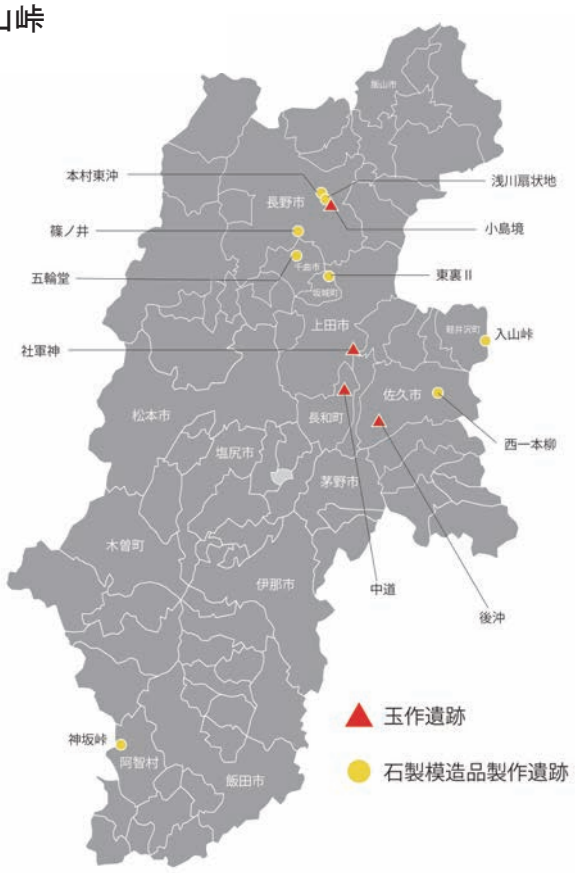


図 13　石製摸造品製作遺跡・玉作遺跡の分布

以下の５つの特徴があげられている。

①一辺８m以上の大型の住居址が集中する傾向が強い。

②出現期のカマドとともに、間仕切り溝やベッド状遺構などの特殊な施設を、画一的とも言いうる状況で有する住居址が多く、カマドの導入は県内でも最も早い時期に位置づけられる。

③古式須恵器が比較的多量に伴う。

④石製摸造品の製作工人に関連する住居址が存在する。

⑤子持勾玉や土鈴など祭祀的な性格を有する特殊な遺物を出土する住居址が存在する。

報告者の千野氏は、これらの特徴と集落規模から、古墳時代中期以降の中核的な集落であったと指摘している（千野 1993）。

本村東沖遺跡の近隣に位置する浅川扇状地遺跡群や篠ノ井遺跡群も規模の大きな集落遺跡であり、中核的・拠点的な集落とみてよいと思われる。

西一本柳遺跡も佐久市を代表する弥生時代以来の大規模な集落遺跡であり、近接する東一本柳古墳出土の金銅製馬具（長野県宝指定）など稀少な遺物を出土する地域である。

また、子持勾玉との関連性も気になる観点のひとつである。本村東沖遺跡と篠ノ井遺跡群では別住居址ではあるが子持勾玉が出土している。五輪堂遺跡でも近隣にあたる大境遺跡から子持勾玉の出土をみる。佐久市の西一本柳遺跡でも数百m程離れた内西浦遺跡や清水田遺跡で子持勾玉が出土している。子持勾玉は長野県内で 42 点が確認されているが、長野市に 18 点がみられる。このなかには玉依比売命神社の神宝９点があり、これを除いても９点と長野県内で最多の出土数となる。千曲市では２点、坂城町で１点、佐久市で２点となっている（櫻井 2024・2025）。当然ながら、製作遺跡が確認されていない下伊那地域の６点など他地域でも出土していることも考慮には入れなければならないだろうが、北信・東信における子持勾玉との石製模造品製作遺跡との関連性は看過できないものと考えられる。

この他、東裏遺跡Ⅱでは大規模な祭祀遺跡である青木下遺跡と隣接しており、その関連性も注目できる。

(3) 工房跡の特徴

新たにみつかった浅川扇状地遺跡群と西一本柳遺跡では大量の未製品が出土している。

浅川扇状地遺跡群ＳＢ3062 では入口部側の床面を中心に石製摸造品やその未製品、剥片、破片が 4000 点以上みつかっている。工作ピットは確認されなかったが、入口部から東壁に伸びる間仕切り溝周辺が作業場の可能性がある。

西一本柳遺跡で工房跡と判断された３軒の竪穴住居址でも工作用ピットはみられなかったが、H11 号住居址とH15 号住居址の床面からはチップや剥片が多量に出土している。この２軒については前述のとおり、ともに長方形で主柱が明確でないことや比較的近隣にあることなど遺跡内でも異質なありかたをしており、２軒が一組として機能していた可能性も否定できないとの報告者の指摘がある。一方で、H19 号住居址からはチップやフレイクは検出されていないため、異なる工程の作業が行われていたか、製品や素材を管理していた場所ではないかとも推測する（小林 2019）。五輪堂遺跡でも未製品やチップ、剥片等が出土しているが工作用ピットは検出されていない。

工作用ピットが確認されているのは東裏遺跡Ⅱのみであるが、西一本柳遺跡のH11 号住居址とH19 号住居址では間仕切り溝がみられている。間仕切り溝は篠ノ井遺跡群ＳＢ35 や本村東沖遺跡 27 号住居址・36 号住居址でも確認されている。本村東沖遺跡 36 号住居址では東壁中央に位置する間仕切り溝とＰ３より伸びる間仕切り溝によって区画されたベッド状部分から石製摸造品の未製品が出土している。これらの事例からみると、間仕切り溝が作業場を区画する働きをしていたと考えられるだろう。

(4) 製作された器種

浅川扇状地遺跡群ＳＢ3062 では有孔円板、勾玉形、臼玉の未製品があり、これらを製作していたことがわかる。西一本柳遺跡では工程については、製作されたのが剣形、有孔円板、勾玉形、管玉、臼玉であり、鉄斧などを用いて原石から方形状の素材を取り出し、さらに正方形に分断した後、穿孔を行い、研磨作業により形状を整えていることが知られる。

対して、本村東沖遺跡 36 号住居址では剣形を中心とした研磨段階のみが出土している。本村東沖遺跡とは約 1.4 ㎞の近隣にある浅川扇状地遺跡群 SB3062 では剣形がみられないことから、工程階階ごとに異なった工房で作業が行われていたことも推測できよう。また、篠ノ井遺跡群ＳＢ35 では臼玉のみの製作であり、詳細は不明だが五輪堂遺跡でも未製品は臼玉のみであったようである。石

製摸造品の製作にはある種の分業が行われていたことが指摘できるだろう（櫻井 1993）。

(5) 峠における未製品

入山峠、神坂峠では少なくない量の未製品が出土している。これについては、神坂峠の報告書で大場磐雄氏も注意している。大場氏は、出土した石製摸造品の中には「孔の穿たれていないものもあり、必ずしも未製品とは考えられぬものであるから、これ等は別な方法で献供したものと思われる。臨時の案か又は石の上において供えたかもしれない。次に石製品中に往々未製品が混じていることである。剣形品や円板、臼玉・勾玉の中に形の整わないものや無孔のものがあり、完成品と考えられぬものがあることはどう解すべきか、或いは現地において完成させるべく未製品を持参したとも考えられ、砥石の出土と合わせ考えてその蓋然性を思わしめるが、しかし果たしてそういう時間的な余裕があるか否か、なるべく速かに通過すべき場所であることから推して、或いは未製品のまま奉献したと解することも出来よう。」と指摘している（大場 1969）。寺村光晴氏も未成品のまま奉献したとするこの見解に賛意を示している（寺村 1980）。

中里信之氏は神坂峠の未製品について、埼玉県熊谷市の西別府遺跡や群馬県藤岡市の長根羽田倉遺跡出土の剣形が穿孔なしであったことからも、はたして未製品なのかには疑問があるとし、今後の研究課題だとする（中里 2015）。

一方、篠原祐一氏は消費地における現地生産もしくは使用時の即時生産がなされた可能性を指摘している（篠原 1995）。こうした可能性は峠祭祀においても想定できるのではないだろうか。未製品のなかには大場氏も指摘するように、穿孔はないが、それ以外は製品と変わらない仕上がり状態のものもみられるため、それらについては「吊るす」以外にも「置く」ことを念頭に入れた使用方法はあったかもしれない。しかしながら、そうした段階以前の未製品が少なくないのも確かである。

また、峠祭祀は個々人によるものではなく、規模の大きな集団によるものであると私はみている。そうであれば、入山峠や神坂峠の現地においても石製摸造品の製作が行われていたと考えることは不自然なことではないのではなかろうか。

さらに、同じく阿智村で神坂峠に近く東山道ルートに推定されている杉ノ木Ａ・Ｂ遺跡でも数は少ないものの、滑石片や未製品が出土している。したがって、滑石製品の生産は、神坂峠をはじめとする周辺遺跡を入れて検討する必要があろう。

(6) 滑石原産地との関係

佐久市教育委員会では、平成 26（2014）年に市内の下聖端遺跡Ⅱ・Ⅲと市道遺跡Ⅲから出土した滑石製玉類の分析を第四紀地質研究所の井上巌氏に依頼して実施している。その結果、下聖端遺跡Ⅱ・Ⅲのものは群馬県藤岡市大奈良と甘楽町秋畑産、市道遺跡Ⅲのものには群馬県藤岡市大奈良と甘楽町秋畑産と兵庫県八鹿系があることが判明した（小林 2019）。２遺跡ともに群馬県産のものは三波川帯産を示唆することになる。

小林眞寿氏は、群馬県の八寸大道下遺跡の報告書での論考を踏まえて以下のように考察する。それによれば、石製摸造品の生産と流通を管理していたのは鏑川流域とそこから原料の供給を受けた第２生産地の豪族たちであり、千曲川上流域ではこれまで第２生産地グループの豪族から供給された原料が安中市松井田方面から供給され、入山峠などで製品に加工されたと考えられてきたという。それが西一本柳遺跡で石製摸造品製作工房跡が発見されたことにより、佐久地域では富岡市方面とを結ぶ内山峠や下仁田町方面とを結ぶ田口峠経由などで群馬県の鏑川流域から直接に原料の供給を受けて玉類の生産を行っていた可能性が強くなったと論じている。

神坂峠出土の石製摸造品については、そのうちの 24 点が東海大学の松本建速氏と産業技術総合研究所の伊藤順一氏による化学成分の分析が行われている（松本・伊藤 2015）。この産業技術総合研究所のエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置を用いた分析結果によれば、すべて緑色片岩製であり、比較した青森県中野平遺跡出土の石製摸造品の化学成分と類似していたことが判明した。両遺跡とも外観では群馬県あたりの三波川帯から採集される緑色片岩と似ているといい、神坂峠遺跡に近い飯田市や大鹿村の三波川帯から得られる石材とは異なる成分で、地元で採集されたものではないことが理解できる。

このように神坂峠出土品についても、その原料は群馬県方面からもたらされたものである可能性が高くなっている（註３）。

(7) 玉作遺跡との関係

長野県内では緑色凝灰岩や碧玉を用いた玉作遺跡が４

か所でみつかっている。

社軍神遺跡（上田市）では、旧丸子町教育委員会が発掘調査を行い、古墳時代の竪穴住居址 47 軒が発見されたが、そのうち７軒が前期の玉作工房跡であった。玉作りの多くは緑色凝灰岩や碧玉を用いた管玉・石釧を製作しているものだが、滑石製品の製作も行われていた。４号住居址では緑色凝灰岩・碧玉の管玉未製品などとともに滑石剥片が出土している。最も玉作り関連遺物の出土量が多い 21 号住居址からは滑石製小形勾玉・擦切途中の滑石剥片が、緑色凝灰岩・碧玉質の管玉未製品や緑色凝灰岩剥片・剥屑などとともにみられている。また、緑色凝灰岩と滑石を用いた鏃形石製品が１点ずつ出土している。47 号住居址では滑石製勾玉の未製品（未穿孔段階）がみつかっている（塩入 1982）。ただし、これらは前述したように石製摸造品ではなく、石製品として考えるべきものである。

長野県内の古墳時代の玉作遺跡は本遺跡の他に３か所で確認されている。

小県郡長和町の中道遺跡は碧玉と緑色凝灰岩を素材として、竪穴住居跡ＳＢ11 で管玉を生産している。

佐久市望月の後沖遺跡では玉作工房跡が３軒とその可能性が高い１軒がみつかっている。緑色凝灰岩を素材としている。

長野市小島境遺跡では竪穴住居跡３軒から緑色凝灰岩や碧玉、鉄石英を素材に、管玉・臼玉・勾玉の玉類と鏃形石製品を製作していた。

中道遺跡が４世紀中頃で先行し、次いで４世紀後半から５世紀初頭の社軍神遺跡・後沖遺跡・小島境遺跡が続くが、それ以降には玉作遺跡はみられなくなる。

そして、社軍神遺跡のみが滑石を用いた玉類を製作しているが、その他の遺跡では緑色凝灰岩や碧玉、鉄石英を用いている。

寺村光晴氏は石製模造品の製作遺跡について、Ⅰ石製模造品のみの製作遺跡（石製模造品製作遺跡）とⅡ玉類（碧玉質等）とともに製作されている遺跡（玉作遺跡）の２つに大別する。そしてⅠは①：玉類、剣形品、有孔円板（石製模造品Ｂ類）を主体とする工房址、②：①にその他の模造品（石製模造品Ａ類）が加わる工房址、③：特定模造品の工房址、の３種に分けられるという（寺村 1980）。長野県内の石製模造品の製作遺跡は、Ⅰ-①のみとみてよいだろう（註４）。

また、椙山林継氏は石製摸造品製作遺跡について、①前期からの玉作遺跡が、徐々に滑石質材の使用・製作を行う遺跡、②石製摸造品として、古墳副葬用の刀子形、斧、鎌などのものや、祭祀用の剣形、双孔円板、単孔円板、鏡形、勾玉、管玉、垂飾品などを主として生産する工房、③臼玉生産を中心とする例、の３つのグループに分類している（椙山 2004）。長野県内の玉作遺跡には、①の例はなく、②のなかでも古墳副葬用のものはみられないことがわかる。

４．おわりに

以上、長野県内の石製摸造品製作遺跡についてまとめてきた。近年、長野市の浅川扇状地遺跡群と佐久市の西一本柳遺跡で新たな製作工房跡がみつかっているが、それでも群馬県などと比べるとその数はかなり少ない。原産地の推定でも群馬県産の原料を用いていた可能性が高い。時期的には神坂峠と入山峠が４世紀後半から祭祀が行われていたとみられるが、それ以外は５世紀後半から６世紀初頭に収まりそうである。また、北信と東信に偏在することも確認できた。これらが長野県の特徴といえるであろう。

長野県内には、長野市の駒沢新町遺跡、松本市の高宮遺跡、坂城町の青木下遺跡など著名な祭祀遺跡も存在している。また、入山峠、神坂峠に雨境峠を加えた全国でも３か所しかない峠祭祀の遺跡がある。こうした石製摸造品を用いた祭祀遺跡を掘り下げていくためにも製作跡の検討は重要である。

今回は石製模造品製作遺跡の紹介にとどまったが、今後はさらに多方面にわたり検討していきたい。

註

(1) 浅川扇状地遺跡群は 78 の遺跡から構成されており、長野市教育委員会では本村東沖遺跡のように遺跡単位で調査・報告している。一方、長野県埋蔵文化財センターでは調査対象地が広く複数の遺跡にまたがるため、遺跡群単位で調査・報告を行っている。そのため、浅川扇状地遺跡を構成する本村東沖遺跡と地点が異なる県埋蔵文化財センター調査の浅川扇状地遺跡群とは別の遺跡として紹介していく。

(2) 工作用ピットがなく、床面に白色粘土が出土した石製模造品製作工房跡としては、群馬県の行力春名社遺跡１号竪穴住居址の例もある。

(3) 石製摸造品のうち剣形については、東国に特徴的なものであり、特に入山峠と神坂峠に出土が多い。市澤英利氏と中

里信之氏は、剣形模造品は大和王権とは別に独自に東国で生み出されたものであること、東国で製作された石製摸造品が入山峠、雨境峠を経て神坂峠へ持ち運ばれたこと、峠の祭祀の主体者は東国の人々であったことなどを指摘している（市澤 2017・中里 2015）。これに対して私は、大和王権が東海道沿いに東国へ進出し、群馬県域（上野国）経由で長野県域（科野国）へ入った可能性も高いのではないかと考えている。

(4) 寺村氏は、玉作遺跡で製作された石製模造品では剣形品はみられないことを指摘した。この玉作遺跡における剣形品の欠如という現象は、剣形品の性格を考える上で重要な視点であると思う（寺村 1980）。

引用参考文献

市澤英利 2008『東山道の峠の祭祀　神坂峠遺跡』、新泉社

市澤英利 2017「国境画定以前の神坂峠―石製摸造品とそのあり方を手掛かりに―」『古代の坂と堺』、高志書院

大場磐雄・椙山林継他 1969『神坂峠』、阿智村教育委員会

風間栄一 2002『篠ノ井遺跡群（５）』、長野市教育委員会

群馬県考古資料普及会 1989『八寸大道下遺跡』

小林眞寿 2019『岩村田遺跡群　西一本柳遺跡ＸＸⅡ』、佐久市教育委員会

駒見和夫・櫻井秀雄 2004「地域編　甲信」寺村光晴編『日本玉作大観』、吉川弘文館

斎藤あや 2011「石製摸造品の研究動向と課題」『帝京大学山梨文化財研究所報』52 号

佐久間正明 2009「東国における石製摸造品の展開―刀子形の製作を中心に―」『日本考古学』27 号、日本考古学協会

櫻井秀雄 1993a「第５章　考察　５本村東沖遺跡の祭祀遺物」『浅川扇状地遺跡群　本村東沖遺跡』、長野市教育委員会

櫻井秀雄 1993b「長野県」『古墳時代の祭祀－祭祀関係の遺跡と遺物』、東日本埋蔵文化財研究会

櫻井秀雄 2005「第２部　資料集　１.古墳時代滑石製品出土遺跡地名表　20 長野県」、「２.滑石製品製作遺跡の概要　20 長野県」『古墳時代の滑石製品』、埋蔵文化財研究会

櫻井秀雄 2024「長野県内出土の子持勾玉」『長野県立歴史館研究紀要』30 号（PDF 版）
（https://www.npmh.net/publication/data/9c97dfce0a07791013c534511e8ce730.pdf）

櫻井秀雄 2025「長野県内出土の子持勾玉（補遺）」『長野県立歴史館研究紀要』31 号（令和７年３月刊行予定）

塩入秀敏 1982「社軍神遺跡」『長野県史考古学資料編　主要遺跡（北・東信）』

篠原祐一 1995「臼玉研究試論」『研究紀要』３号、栃木県文化振興事業団　埋蔵文化財センター

篠原祐一 1996「剣形模造品の製作技法―下毛野地域を例にして―」『研究紀要』３号、栃木県文化振興事業団　埋蔵文化財センター

椙山林継 1983『入山峠』、軽井沢町教育員会

椙山林継 1998「玉と魂」『日本の信仰遺跡』、雄山閣

椙山林継 2004「古墳時代後期の滑石質材玉作」寺村光晴編『日本玉作大観』、吉川弘文館

助川朋広 1994『南条遺跡群　東裏遺跡Ⅱ・青木下遺跡』、坂城町教育委員会

千野浩 1993『浅川扇状地遺跡群　本村東沖遺跡』、長野市教育委員会

寺村光晴 1966『古代玉作の研究』、吉川弘文館

寺村光晴 1980『古代玉作形成史の研究』、吉川弘文館

中里信之 2015『石製摸造品と神坂越え』、阿智村東山道・園原ビジターセンター　はゝき木館

廣瀬時習・福田由里子 2005「近畿地方における滑石製品の生産と原石流通」『古墳時代の滑石製品―その生産と消費―』、埋蔵文化財研究会

西香子他 2021『浅川扇状地遺跡群』、長野県埋蔵文化財センター

東日本埋蔵文化財研究会 1993『古墳時代の祭祀－祭祀関係の遺跡と遺物』

深澤敦仁 2001「群馬県の石製品・石製摸造品製作址について」『考古聚英　梅澤重昭先生退官記念論文集』

深澤敦仁 2003「石製摸造品生産流通に関する素描－群馬県の事例からのアプローチ」『考古学に学ぶ（Ⅱ）』同志社大学考古学シリーズⅧ

深澤敦仁 2005「原石の流通と玉作（関東）―群馬県地域の様相に基づく仮説モデルの提示―」『古墳時代の滑石製品―その生産と消費―』、埋蔵文化財研究会

深澤敦仁 1994『行力春名社遺跡』、群馬県埋蔵文化財調査事業団

埋蔵文化財研究会 2005『古墳時代の滑石製品―その生産と消費―』

松本建速・伊藤順一 2015「付載　神坂峠遺跡出土石製摸造品の化学成分」『石製摸造品と神坂越え』、阿智村東山道・園原ビジターセンター　はゝき木館

矢島宏雄 1978「更埴市五輪堂遺跡発掘調査速報」『信濃考古』№47、長野県考古学会

矢島宏雄 1982「五輪堂遺跡」『長野県史考古資料編　主要遺跡（北・東信）』